全国シルクのまち情報誌

知・る・く

平成２５年３月

No.4 春 号

シルクのまちづくり市区町村協議会

情報誌の名称の『知・る・く』は、「シルク」の事を「知る」、「シルク」の街を「歩く」という意味が込められており、３つのフレーズを融合させた造語です。
「知」の「口」部分は絹糸をイメージ。同時にシルクの無限大（∞）の可能性も表現しています。「く」の下部には靴をあしらい、街を歩くイメージと協議会の前進の意味を込めました（足利市商工振興課の杉戸さんによる発案・命名です）。

No.4 春号>>>Contents

●協賛団体(産地織物組合)のご紹介

（１）協賛団体のご紹介 …… 1

（２）福島県絹人繊織物構造改善工業組合 …… 2

（３）丹後織物工業組合 …… 5

●“新加入”協賛団体(GS 世代研究会)のご紹介

（１）協賛団体の概要 …… 10

（２）GS 世代研究会入会案内パンフレット …… 11

（３）GS 天然素材分科会の概要 …… 15

●会員自治体の情報(シルクに関わるイベントや取り組みなど)

（１）新潟県十日町市 …… 16

（２）京都府京丹後市 …… 17

（３）京都府与謝野町 …… 18

（４）鹿児島県奄美市 …… 19

《参考資料》

シルクのまちづくり市区町村協議会・構成員一覧 …… 20

シルクのまちづくり市区町村協議会の設立趣意書 …… 21

協賛団体のご紹介

シルクのまちづくり市区町村協議会では、幅広い意見を聴取するとともに、協議会事業の推進に関し協力を得るため、シルクに関する様々な団体に協賛団体として加入いただいています。

現在、蚕糸団体、産地織物組合、絹業団体など全 25 団体が加入しています。

今回はその中から、産地織物組合に属する 2 団体にお願いし、産地の歴史や発展の経過、最近の取り組みなど、織物産地の概要について記述いただきましたので、ご覧ください。

①福島県絹人繊織物構造改善工業組合

②丹後織物工業組合

～福島県　「川俣シルク」　福島県絹人繊織物構造改善工業組合～

□川俣絹織物の歴史

福島県地図（川俣）

※ JR福島駅よりバスで約45分

みちのくの玄関口である福島県は、磐梯山・猪苗代湖をはじめとする自然景観の美しさは言うに及ばず日本有数の絹織物の産地として知られています。

特に、吾妻・安達太良山の麓に広がる信夫地方(福島市中心）、そして川俣羽二重で名を馳せたる伊達地方（川俣町・飯野町(現在は福島市)中心)は、古来から養蚕･機織業が非常に盛んな土地で、強固な屏風のように左右に連なる奥羽山脈は、桑の育成に最も適した気候風土であり、純白な輝きと光沢をもつ絹が生まれるべくして誕生したといえます。

川俣の養蚕・絹織物は、史誌の伝えるところによると、今からおよそ１４００年前、崇峻天皇の妃であった小手姫が、蘇我馬子に故郷大和を追われた皇子を探しもとめてこの川俣に辿りつき、桑を植え養蚕を行い、糸をつむぎ、機織の技術を伝えたといわれています。この時から、絹は川俣の物産として各地に広がり、楯絹の名声は、全国に波及しました。

□発展の過程

その後、川俣の絹織物は時代の要請と共にますます発展の一途を辿り、江戸時代に入ると、川俣に定期的に生糸・羽二重の二七市が立ち、川俣周辺で生産された生糸を仕入れ、絹を織りあげて販売していました。

幕末期、安政の五カ国条約により日本は植民地支配を拡大しつつあるヨーロッパ列強との自由貿易の真っ只中に投げ出され、輸入商品の一つとなった生糸の輸出増加により、国内生糸の価格が高騰し、絹織物生産を一気に衰退させることになり、川俣の平絹生産も同様の過程を辿りました。川俣の絹織物は、衰退を打開するため、明治８年に織物の研修目的に２名を京都に派遣し、翌年には伝習を終え、バッタン機をたずさえ帰郷し、明治１０年にバッタン機を設置した川俣紡織会社が営業を開始することになり、これが明治期川俣絹織物業復活の第一歩となりました。

川俣の輸出向け軽目羽二重製織は、明治１６年に安田利右衛門が、西陣視察の帰路桐生の尺八寸巾広羽二重に出会い、輸出に有利であることを知り、羽二重製織の職工・機械を桐生より移入し生産を始め、翌年には横浜ローゼンソール商会に川俣羽二重の販売に成功し、これが川俣羽二重の誕生となりました。

明治３９年大橋哲也により軽目羽二重専用の半木製織機が発明され、明治４１年大橋兄弟式力織機へと改良され、同年１１月より川俣電気株式会社の操業に伴い一気に普及し、明治・大正・昭和前期にかけて、北陸の福井・石川と並び称される羽二重の三都として地

位を確立しました。そして、横浜商品を介して世界市場へ進出し第一期黄金時代をつくりあげました。

明治４２年の絹織物工場

川俣絹布製練㈱が作成した1911年版のカレンダーの表紙。欧米に輸出される絹織物にプレゼントとして使われました。

この間、明治３７年に東北地方で最初の日本銀行として７番目の店舗として日本銀行福島出張所が開設されました。（明治４４年に支店に昇格）当地が当時重要輸出品であった、生糸や川俣地方を中心とした絹織物の集散地であり、東北金融の中心であったためと思われます。

永い伝統に培われた軽目羽二重は、戦後いち早く復興を遂げ、戦前以上に川俣羽二重の名声を欲しいままにしました。昭和２９年、突如アメリカの政策による可燃性織物輸入禁止令により、４匁以下の羽二重が含まれることになり、生産が激減することになりましたが、いち早く交織６．２５匁を開発し、昭和３１年に、ナイロン・アセテート・キュプラ等化合繊織物が導入され、以後技術革新を繰り返し生産量も増加し、絹織物産地は、化合繊織物を合わせ持つ総合産地と大きく転換しました。

□産地活性化の取り組み

川俣の絹織物は、昭和３０年頃までは主に軽目羽二重を生産していましたが、国内外の環境の変化に伴い、化合繊織物を取り入れ、羽二重の技術を活かし和装裏地、スカーフ地中心へと変り、昭和５０年代には、横浜における絹織物スカーフ生産の約半数を生産し、国内有数のスカーフ地産地として発展してきました。

その後、中国を中心としたアジア諸国からの安価な生地・製品の輸入と、国内市場の低迷等が進む中、新商品の開発、販路開拓、人材育成事業に取り組み、従来の大量生産型産地から、少量・短納期への対応を図り、昭和５７年に「第１回ふくしまのおりもの展」を東京日本橋「綿商会館」において開催し、以後今年まで３２回の単独展の開催、海外展への参加、ジャパンクリエーションへの参加等、新たな販路の開拓を図り、新しい取引ができるなどの成果を得ています。

また、１０年前よりファッション関係の大学、専門学校等とのコラボレーションに取り組み、産地の生地を使い、学生の自由なテーマにおいての製品化事業も行い、将来に向けた人材の育成にも力を入れています。

□復興へ向けて

平成２３年３月１１日、三陸沖を震源としたマグニチュード９．０という大きな地震が発生し当町においても震度６弱という未だ経験のない大惨事に見舞われ、停電・ライフラインの崩壊・設備のズレ、工場の壁・天井崩落等大きな被害を受け、１０日前後の休業を余儀なくされ、加えて福島第一原子力発電所の事故に伴う放射能飛散による風評被害も大きな問題として発生し、産地存亡の危機的状況の中多くの方からのご支援、励ましを頂きこの間、中小企業等グループ施設等復旧整備事業を活用し、被災した施設、設備の復旧に取り組み産地活性化を図るべく事業に取り組んでいます。

８デニール（髪の毛の約６分の１）を使った
妖精の羽によるウェディングドレス

このような中、会員企業においても「第４回ものづくり日本大賞最優秀賞内閣総理大臣賞」を、川俣産地の原点ともいえる軽目羽二重の技術を活かし世界一薄い先染織物 『 妖精の羽 』（フェアリーフェザー）の開発により受賞し、国内外に産地の高い技術力と復興に立ち向かう姿を発信致しました。

組合においても、産地復興の足がかりとして産地原点の川俣軽目羽二重を活用した、従来の用途（提灯･資材等)以外の商品開発に取り組み、後加工・染色の研究を行ない、ストールを中心とした商品開発を行い昨年１２月の「ふくしまのおりもの展」において、その成果を発表し多くの方から高い評価を受けることができました。

川俣の絹織物は、日本でも有数の羽二重、スカーフ素材の産地として発展してきましたが、和装需要の減退、ファッションの変化、海外からの安価な輸入増加に加え、高齢化、後継者、震災からの復興等大きな問題がありますが、国、県、町、関係団体等からの支援を受けながら、国内はもとより、世界に向けた商品開発にこれまで以上に取り組み、産地活性化を図っていきたいと考えています。

展示会

□事務局

福島県絹人繊織物構造改善工業組合
住　所：福島県伊達郡川俣町字鉄炮町４７
ＴＥＬ：０２４－５６５－３２４１
ＦＡＸ：０２４－５６５－２５６４
http://www.chuokai-fukushima.or.jp/fukuori./
E-mail：orikumi@athena.ocn.ne.jp

～京都府「丹後ちりめん」の里、丹後織物工業組合～

■ 絹織物の里「丹後」

丹後松島(京丹後市丹後町)

丹後ちりめんの産地“丹後地方”は、京都府の北部、日本海側に面した丹後半島一帯をいいます。景勝地・日本三景「天橋立」、入り江の海岸線が美しい「丹後松島」、鳴き砂の「琴引浜」など風光明媚な名所、四季折々の自然を堪能することができます。

また丹後地方は昔、大和文化と出雲文化の交流地として、大陸との交易地として栄え丹後独自の文化が開けていたとされています。これを実証するかのように、丹後の各地にはさまざまな古墳群が点在し、日本の歴史上貴重な遺産が数多く出土しています。

■ 丹後ちりめんの起源

和銅4年(西暦711年)、元明天皇が丹波(のちの丹後)など21カ国に挑文師(あやとりのし)を使わし錦綾を織ることを習わせたとあり、この当時が丹後地方における絹織物生産の起源とされていますが、未だ定かではありません。

奈良時代の天平11年(739年)には丹後で織られた絹織物が聖武天皇に献上され、いまでも正倉院御物として保存されています。また、鎌倉時代の僧玄慧作と伝えられる「庭訓往来」には、当時丹後の代表的な織物であった絹精好が京都の「七座の店」で商われたと記述されています。

峯山藩主 京極高長公より佐平治へ贈られた暖簾(復元)

江戸時代に入り、丹後は大飢饉に何度も見舞われ、織物も高級品であったため販路が狭く衰退するも、この惨状を救うため峰山の絹屋佐平治(後に森田治良兵衛に改名)は寺の観音に断食祈願を行い、その足で京都・西陣へ赴きちりめん織り技法、撚りの仕掛けを学び帰り、享保5年(1721年)、試行錯誤の末今までにない独特のシボをもったちりめんを織り出すことに成功します。これと前後して加悦谷地方(与謝野町)の手米屋小右ヱ門、山本屋佐兵衛の二人も木綿屋六右ヱ門の支援の下に西陣にてちりめん技法を学び広く民衆に伝え、現在の丹後ちりめんの礎を築きました。

■ 発展の過程

もともと丹後は絹織物を生産していた土壌があり、地元藩主もちりめん織りを保護育成したため瞬く間に丹後地方全体に広まり、特に京都室町の呉服所から出火した「享保焼け」により大打撃を被った西陣にかわり、地方のちりめん産地として唯一の存在であった丹後産地は飛躍的な発展を遂げ、丹後ちりめんの確固たる地位を築くことになります。大正時代に入ると織機も手機、足踏機から力織機へと代わり、生産量も飛躍的に伸びていた矢先の昭和2年、この地を襲った丹後大震災により産地は壊滅的な打撃を受け、織機の約7割が損壊しました。しかし奇跡的な立ち直りをみせ、昭和3年に念願であった国練検査制が完全実施されるや否や、日本全国で丹後ちりめんの宣伝活動が活発に行われ戦前の黄金時代を迎えます。

太平洋戦争の勃発により七・七禁令が公布され、機業整備による縮小など産地は存亡の危機に瀕したものの、戦後の復興とともに高度成長と和装ブームに支えられ一大産地を形成していくことになります。一方、昭和25年ごろより西陣から先染織物の出機が進出しその台数も瞬く間に増え、また昭和30年代に入ると合繊織物の導入育成に力点を置き総合産地化を目指します。こうしてオイルショック前の昭和48年の丹後ちりめん生産量はピークとなる920万反（1反13m換算）、産地全体の推定出荷額は2，119億円を記録しました。

■ 丹後ちりめんの特徴

丹後ちりめんは経糸に平糸又は駒糸、緯糸に1m当たり3,000回前後の強い撚りをかけた強撚糸を交互に織り込み、精練加工におけるシボ揚げの過程で強撚糸の解撚力、収縮力が生じることによって生地のふくらみと独特のシボ（凹凸）が生まれることを最大の特徴とする織物です。このシボによりシワがよりにくく、しなやかな風合いに優れ、凹凸の乱反射によって染め上がりの色合いが豊かな、しかも深みのある色を醸し出すことができます。

丹後ちりめんは無地ちりめんと紋ちりめんとに大別されますが、組織にさまざまな変化をつけて多種多様な品種を小ロットにて生産されています。このちりめん技法は服地用途の広幅織物、衿・帯揚げなどの和装小物織物に生かされています。

■ 組合の沿革

丹後機業の組織化は、明治17年農商務省令の「同業組合準則」及び同18年京都府公布の府令に基づき「丹後縮緬業組合」が結成されたことに始まり、その後、解散・結成が繰り返されますが、粗製濫造や不当な取引が横行したため大正10年10月、産地内で織物の精練加工を行う「国練り」と、製品の品質検査を行い丹後ちりめんの信用を高める「国練検査」制度の確立を図るため、丹後の機業家が大同団結し「丹後縮緬同業組合」が誕生します。（当時の組合員数2，075名、織機台数6，146台）

その後も改組・名称変更を繰り返し、戦後間もない昭和24年には中小企業等協同組合法の公布に伴う丹後織物工業協同組合が結成され、昭和38年4月、中小企業団体の組織に関する法律に基づき、現在の「丹後織物工業組合」が発足し現在に至っています。

■ 組合の事業

指導事業 … 産地活性化への諸施策に取り組む

組合員に対して、国内外の市況、経営、労務などに関する情報収集及び提供、後継者の育成、取引条件の改善に努め、組合員機業の経営安定を目指した種々活動を展開しています。

また、主力生産品目の白生地織物に加えて、先染・広幅洋装分野へと広範囲にわたった産地製品の拡大に努めるため各分野における新商品開発の支援、展示商談会などの機会を通した販路開拓への支援、プレゼンの強化策を実施し総合産地化へ向けた取組を行っています。

さらには、消費者へ向けたPR・宣伝活動として「きものまつり」などを開催し、丹後織物の需要拡大に取組んでいます。

加工・検査事業 … 優れた製品を市場に送り出す加工技術

組合の共同経済事業として、絹・化合繊に特化した組合直営の加工施設2工場を有し、永年にわたり培われた加工技術により、ニーズに対応した精練・整理・仕上げ加工を施すとともに、高品質のこれらの製品を市場に送り出すために厳しい検査を実施し、品質保証、産地ブランドマークの信頼を支えています。

ブランドマーク及び日本の絹マーク

さらに各種織物、絹糸への改質加工等を実施し、産地製品の高付加価値化、差別化商品づくりに大きな役割を果たしています。こうした加工技術は産地のみならず、受託加工にて他産地の製品にも丹後の技術をご利用いただいています。

また、京都府の公設機関と一体となり製品の多様化、高品質化に対処し、商品開発のための各種加工技術試験・研究を実施しています。平成23年には組合・京都府・府立医大との共同研究により、世界的なパンデミックが心配される“鳥インフルエンザウイルス”を不活性化させる加工技術を確立し、マスメディアにも大きく取り上げられました。現在、綿素材のみの実証ですが、他繊維での応用、また他のインフルエンザウイルスへの効用も検証していく予定で、今後の展開に期待を寄せているところです。

■ 絹セリシン「きぬもよふ」

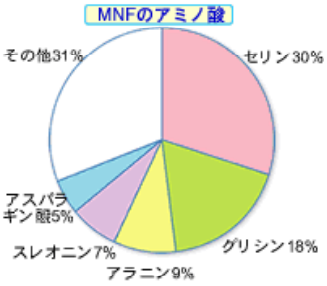
シルク100％の白生地織物は組合直営の工場にて「精練加工」という工程にてセリシンを除去するのですが、このセリシンが使用される生糸全体の約25％を占めています。繊維製品としての「絹」はフィブロインであり、従ってこの「セリシン」という成分についてはその存在すらほとんど知られず、精練工程において廃棄されてきました。しかし、フィブロインが繊維としてすばらしい性能を有していると同時に、セリシンも生体との関わりの中で限りない機能性を秘めていることが解り、その有効利用が注目されています。

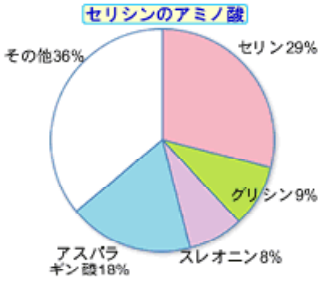
絹セリシン

組合では京都府の公設試験研究機関の指導を頂きながら、平成11年より「絹セリシンの回収有効利用技術開発」の開発研究に取組み、セリシン回収技術の基礎を確立するとともに事業化へ向けた商品開発の取組みをスタートさせ、そして精練排液からではなく、丹後ちりめんから直接的にセリシンを抽出することに成功し、これを「絹セリシン」と名付けまし

た。これは他社のセリシンとは差別化した「丹後織物工業組合のセリシン」であること、セリシンが新しい絹の成分であることをよりわかりやすくアピールしようと意図するものです。

絹セリシンは繊維質であるフィブロインに比較して分解されやすく、また水にも溶けやすい点が大きな違いです。セリシンに含まれるアミノ酸の中でもセリンが最も多く、このセリンが肌の保湿にとても良いとされています。そして、セリシンのアミノ酸組成が肌の天然保湿因子（NMF）中のアミノ酸組成と非常によく似ていて、肌をみずみずしくしっとりと保つ保湿作用と、外部の刺激から肌をガードする保護作用にとても優れています。





絹セリシンの事業化については、その特性から化粧品メーカーとタイアップしてスキンケアのための基礎化粧品の開発に取組み、平成13年3月に化粧品「きぬもよふ」として商品の販売を開始しました。さらにもっと多くの人に絹セリシンに触れていただきたく、平成14年2月、絹セリシン配合の入浴液「まゆのお風呂」を発売。その後も商品ラインナップを増やし、またリニューアルさせながら販促活動を展開しています。

きぬもよふ商品ラインナップ

今後も新しいアイテム商品の開発や新しい用途分野の開拓を進めて行く予定で、その一環として現在、「丹後ちりめん」・「京丹後宇治茶」という地元地域資源を活かした農商工連携に基づく新商品開発に取組んでいます。

■ 新たな可能性を求めて

産地では今、業種を問わず方向性を同じくする機業が目指す商品アイテム毎にタッグを組み、デザイナー、プランニング会社などのコーディネートの元に海外展開をも視野にして、新たな素材展開に向けての取組が進んでいます。

各機業がそれぞれ携える自己の持つノウハウで製作された単品商品による売り込みでは商品展開が難しいこともあり、バリエーション豊かな産地の商品を明確なコンセプトのもとに総合的にコーディネートし、新しい市場に向けて提案するものです。さらに共同開発、共同販売体制を構築することで、従来の流通を整理し、より消費者に近いところでの商いを目指すものであり、各プロジェクトで熱いものづくりを展開しているところです。

また産地組合の動きとしては、以前から単発的には素材展示会向けにコスチュームデザインを学生に依頼して制作してきたことはありましたが、数年前から地元行政の支援を受け、産官学で新しい織物用途の開拓を目的に、ファッション関係の大学、専門学校等と連携し、学生の希望する産地素材を提供しながら制作課題に取組み、コレクション等の場で産地、素材のPR を行っています。並行して産地、織物に関する知識の修得と、織物素材が作られるまでの実際の生産、加工現場を直接体感してもらうために産地研修・見学の受け入れを行っています。

こうした連携の中で、将来日本の服飾業界を担う若い世代が伝統産地、伝統素材に直に接

することにより、将来的に産地のプロモーションに大きく繋がることに期待するものです。

■ 世界のシルク産地を目指して

丹後産地は日本でも有数の絹織物産地として発展してきましたが、主力の和装需要の減退により他の織物産地と同様、高齢化、後継者難の問題を抱えているのが実情です。そうした中でも20～40歳代の若手機業家、いわゆる事業後継者が育ちつつあり、JAPANブランド育成支援事業による海外展開をはじめ、丹後の高い技術力を海外へ発信する動きが出始めています。これまでより洋装事業者においては商社を通じた販売実績はありますが、和装事業者による海外市場への挑戦はこれまでにない動きといえます。

ただ、やはり織物規格等に問題があり、生産設備も含め今後の克服すべき課題としてありますが、大量生産できない素材、技術力は高い評価を得ており、将来を展望する中で国内市場はもとより、世界のマーケットニーズに応えうるこれまで以上の“ものづくり”そして“販路拡大”に努め、丹後産地がシルク産地として、また世界の「TANGO」として認知されるべく、事業者はもとより組合、地元行政、三位一体となった取組を推進していきたいと考えています。

■ 事　務　局

【組合本部】

所在地：〒629-2502 京都府京丹後市大宮町河辺3188番地
TEL：0772－68－5211（代）／FAX：0772－68－5300
HP：http://www.tanko.or.jp/　　Mail：tanko@tanko.or.jp

【絹セリシンに関するお問い合せ先】

◇ **新規事業部**　〒629-2502 京都府京丹後市大宮町河辺3188番地
TEL：0772－64－2871／FAX：0772－64－2146
HP：http://www.kinumoyou.com/　Mail：order@kinumoyou.com

【加工技術に関するお問い合せ先】

◇ **中央加工場**　〒629-2502 京都府京丹後市大宮町河辺3188番地
TEL：0772－64－2490（代）／FAX：0772－64－2492

業務の内容	和装織物の精練・染色・整理、糸練・糸染・糸及び織物の改質加工等 服地等広幅織物（絹・交織）の精練・染色・整理【200cm巾迄の加工】
精 練 加 工	石鹸アルカリ精練法 ・酵素精練法
特 殊 加 工	サニーライク加工【黄変防止】・ハイパーガード加工【防スレ】・撥水加工・蒸絨加工・スリップ防止加工・樹脂加工・ハイジ加工【抗菌・防カビ】・UVカット加工・難燃加工・ノンフィル加工【ピリング防止】・セリシン定着加工・防染加工・増染加工

◇ **岩滝加工場**　〒629-2262　京都府与謝郡与謝野町岩滝2238番地
TEL：0772－46－3101（代）／FAX：0772－46－3104

業務の内容	化合繊織物を主体とした和装及び服地織物の精練・染色・整理加工、複合素材を含めた反染めからの一貫加工対応もさせて頂いております。
主 要 加 工	ポリエステル繊維の吊り練り減量によるドレープ性を持たせた風合い加工、4種類の濃染フォーマルブラック対応(FB,UB,YFB,TSB)、レーヨンちりめんの染色・精練、シルク広幅のハイパーガード
特 殊 加 工	鳥インフルエンザウイルス不活性化加工「クリーンティ加工」

“新加入”協賛団体のご紹介

～協議会に新たな協賛団体が加わりました～

シルクのまちづくり市区町村協議会では、組織の拡大により活動を推進するため、会員自治体、顧問および協賛団体の勧誘活動を行っています。

昨年の８月に新たに加入いただいたのは、「**GS 世代研究会**」です。GS 世代研究会は、年代別にみて資産と時間に「ゆとりが残る唯一の層」といえる６０代を狙った商品開発やサービスの提供等を研究・実践することを目的に、民間企業や全国の自治体で組織する団体です。

シルクのまちづくり市区町村協議会からは、唯一、京都府京丹後市が幹事団体として加入しています。

GS 世代研究会には、６つの分科会が存在し、その一つに「天然素材分科会」があります。この分科会は、「シルク」をテーマとした商品開発等に取り組んでおり、本協議会の目指すべき方向と共通する部分があります。

協議会では、この GS 天然素材分科会と連携し、新たなシルク製品開発やシルク関連産業の創出に取り組んでいきたいと考えており、平成 24 年度から協議会の事業として位置づけ連携を図っています。なお、過去２回の幹事会において、GS 世代研究会会員企業で天然素材分科会の世話役を務めるハリウッド㈱の岩本氏をお招きし、分科会の活動状況をお伺いしたり、協議会活動へのアドバイスをいただくなど交流を重ねています。

今後も、GS 世代研究会会員企業と協議会の会員自治体傘下の企業等との多角的連携や、ビジネスマッチングにつなげられるよう、連携を深めていければと考えています。

GS 世代研究会に加入する京丹後市では、昨年の１０月末、天然素材分科会に加入するＧＳ世代研究会会員企業の訪問を受け入れ、丹後織物工業組合や織物事業者等との交流が行われました。その成果として、ＧＳ世代研究会会員企業であるハリウッド㈱と丹後織物工業組合との連携が生まれ、現在絹の成分であるセリシンを使った「爪のマッサージ用コスメ」の共同開発が進んでおり、今後の商品化が期待されています。

本協議会の関係団体におかれましては、ぜひ GS 世代研究会への入会をご検討いただければと思います。

次ページ以降、GS 世代研究会の入会案内パンフレットおよび天然素材分科会の概要を掲載していますので、ご覧ください。

SIXTY'S GOLDEN 60's RESEARCH

GS世代研究会

（ゴールデンシクスティーズ＝黄金の60代）

「GS 世代研究会」入会のご案内

GS世代研究会 検索 http://www.gs-kenkyu.com

「GS世代研究会」の御案内

「GS世代」とはゴールデンシクスティーズ、「黄金の60代」という意味です。戦後のベビーブーム世代を中心とするこの世代は、50代までの現役世代が所得の伸び悩みが顕著となる中で、そこそこの資産を形成し、時間を自由に使うことができる「ゆとりが残る唯一の層」といえます。しかし現実には、「せめて孫のランドセル消費」という「欲しいものがない世代」といえるでしょう。

それではなぜ「GS世代」の消費をあらためて研究するのでしょうか。

その最大の理由は、日本の今後の発展のため、だと考えます。これから日本が生き残るためには、他国をリードする付加価値の高い商品やサービスを作っていかなければなりません。これまでも日本商品は品質の良さを最大の売りものにしてきましたが、それはこの国の消費者が世界でもきわめてまれな上質の商品を求め、こまやかな感性をもち、口がうるさかったことと無関係ではないと思います。つまり厳しい消費者がより高度な商品を求める風土が、高品質商品・サービスを育んできたということです。

しかし、今後、日本の消費社会は変質してゆく心配があります。

失業率の高まり、非正規雇用の増大、所得の減少・・・・。こうした問題は若い層ほど深刻です。商品の質よりも、とにかく安いことが最大の購買要因、という人々が多数になれば、当然国内企業の付加価値商品開発に対する熱意も薄れてゆくはずです。これでは日本が世界に誇る競争力を失うことにもなりかねません。将来にわたり日本が世界に冠たる高品質な商品・サービスを作り続けるためにも上質顧客の開拓が求められます。「GS世代研究会」活動の理念はまさにここにあります。

そしてもう一つ、なぜ地域活性化が「GS世代研究会」の活動テーマなのでしょうか。

「GS世代」の研究は60代に売れる商品開発のためだけではありません。彼らが70代、80代になる本格高齢時代に向けた準備という視点も欠かせません。その高齢化を先取りしているのが、地方経済です。

企業が地方自治体と連携し、ビジネスを行いながら住民にどんなベネフィットを与えることができるか実験をすることは、やがて日本全体をフィールドにするビジネスになるでしょうし、さらに言えば高齢先進国日本のビジネスを海外に移転することで世界をリードすることにもつながるはずです。

震災後、困難な状況を乗り切るため家族の絆を深めようという動きが顕著となっています。「GS世代」を祖父母とする親子三世代の消費動向からも目が離せません。「GS世代」の研究は、つまるところ日本経済を凝視することにほかならないと考えます。

「GS世代研究会」は発足以来、幹事・一般会員を増やし、企業間の連携による事業創出はもちろん地方自治体に「地域活性化プロジェクト」を提案したり、商業施設でイベントを行うことなどGS世代向けの商品や観光のPRをする企画をたててきました。

今後は会員企業や自治体の商品を通販などで販売するなど市場拡大に努めてまいります。

座長　西村 晃 プロフィール

経済評論家

1956年 東京生まれ。早稲田大学卒業後NHK、テレビ東京を経て独立。

東京都市大学講師、千葉商科大学教授を歴任。

「日本が読める国道16号」を発表して以来20年あまり、

GS世代を追跡研究してきたマーケティングの第一人者。

分かりやすい講演が全国で人気。

この研究会立ち上げのきっかけとなった「GS世代攻略術」

（PHP）の著者。

西村　晃

主な活動内容

●**シンポジウム**（年1回開催）
GS世代研究会の基幹行事です。GS世代の消費はもちろん高齢社会の進展など社会状況の変化の中でどんな商品開発が求められるか浮き彫りにします。
交流会も行い会員同士の交流も促進させます。

●**勉強会**（年2回開催）
毎回テーマを決めて講師に研究の成果を発表してもらい、質疑応答により議論を深めます。会員同士の交流の場も提供します。

●**見学会**（年2回開催）
GS世代の理解を深めるためのフィールドワークを行ないます。老人施設、SCをはじめ会員企業の研究所なども対象に加えます。

●**専用ホームページ**
ホームページhttp://www.gs-kenkyu.comを開設
会員にパスワードを付与します。会員ページではシンポジウム、勉強会、見学会などのレポートをはじめ、GS世代研究会の調査・論文などを掲載します。

●**事務局より毎日発信するメール連絡により自社の商品を会員相互にPRできるほか、幹事・一般企業会員の間でコラボレーションを行うことでビジネスチャンスを拡げます。**

一般企業会員　入会の御案内

●一般企業会員は、「GS世代研究会」が主催するシンポジウム、勉強会に1社あたり3人まで参加できます。
一般企業会員は、専用ホームページをパスワードにより閲覧できます。

●入会のためには1社ごとに下記の費用をお納め頂きます。
入会金　**2**万円　年会費　**3**万円　（但し、交流会の飲食費用などは別）

一般個人会員　入会の御案内

●一般個人会員は、学生・社会人を問わずどなたでも御入会頂けます。
会員は「GS世代研究会」が主催するシンポジウム、勉強会に御本人おひとりのみ、参加できます。
一般個人会員は、専用ホームページをパスワードにより閲覧できます。

● 一般個人会員は名札も個人名となり、会社の紹介、プレゼンテーションなどはできません。
研究会内部で企業として活動する場合は、一般企業会員としてお申し込みください。

●入会のためにはお一人ごとに下記の費用をお納め頂きます。
入会金　**2**万円　年会費　**1**万円　（但し、交流会の飲食費用などは別）

※一般企業会員、個人会員とも、シンポジウム、勉強会1回のみの参加はできません。
年会費を納めた会員の方のみに出席のご案内をさしあげます。
※「GS世代研究会」ではシンポジウム、勉強会以外に見学会も行いますが、定員に限りがあるため、先着申し込み順とさせて頂きます。
※入会は申込書に必要事項を御記入頂き、事務局にFAX頂くか、またはホームページの専用フォームからお申込み頂くこともできます。
※申込書到着後、請求書をお送りします。
※年会費はお申込みの月から「1年間有効」です。翌年1年経過前に次年度の年会費の御請求をさせて頂きます。
（なおお振込みの際の金融機関手数料は御負担頂きます）
※特に退会のお申し出がない限り、翌年度の更新は自動継続とさせて頂きます

幹事企業・団体（2012年12月現在　順不同）

天草市　佐賀県有田町　石垣市　長万部町　鎌倉市　京丹後市　登米市

名寄市　東松山市　幌加内町　松阪市　南砺市　大和市　和歌山県有田市

イトーヨーカドー　おのや三陸　いで湯とくだものの里 ふくしま　KASHO　信州大学繊維学部　鶴見大学

ヤマト運輸　Wacoal　ROYAL PARK HOTELS　老舗 ヤマト屋 since 1892　マルカツグループ 勝 魚長食品 www.hakodate-factory.com　Kintetsu 近鉄百貨店

ISETAN MITSUKOSHI HOLDINGS　Keio　KEIO　ginza Waggu　KOKUBU　NPO 紀州熊野応援団

かなしみを、ほほえみに。 株式会社ニチリョク　信頼される安心を、社会へ。 SECOM　メイ・ウシヤマの ハリウッド化粧品 六本木ヒルズ　100B SEMBA CORPORATION 株式会社 船場　近畿日本鉄道　HASEKO

都市に豊かさと潤いを 三井不動産　東急不動産　SUNTORY　TOSHIBA　HOYA　TOPPAN

YAMAHA　第一興商　白洋舎 CLEAN LIVING　鈴廣かまぼこ　明太子をつくってよかった。 博多中洲 ふくや www.fukuya.com　お口の恋人 LOTTE

MIZUHO みずほ銀行　北洋銀行　北海道銀行　西武信用金庫　東京東信用金庫　産経新聞社 夕刊フジ

繊研新聞　SENKEN　日経BP社　商業界　北海道新聞社　ニッポン放送　PHP

仲間が広がる、旅が深まる クラブツーリズム　連携＆競争。そして、創客へ。 観光機構　JR北海道　JAL JAPAN AIRLINES　ハウステンボス

フェロー紹介（敬称略）

マイク眞木
（歌手）

藤井まり
（精進料理研究家）

ナターシャ・グジイ
（歌手）

花井　芳喜代
（婦人服専門店協会）

小松崎　雅晴
（経営コンサルタント）

GS世代研究会

【事務局：コンサルティング・エース】
TEL045-866-3271／　FAX045-866-3272
E-mail:consulting-ace@akira-nishimura.co.jp
http://www.gs-kenkyu.com
〒244-0817　神奈川県横浜市戸塚区吉田町130-1-202

ＧＳ世代研究会「天然素材分科会」の概要

■メンバー企業・団体一覧（2012 年 10 月 22 日現在・21 企業・団体、順不同）
ハリウッド 株式会社、株式会社 繊研新聞社、株式会社 銀座マギー、株式会社 ロッテ、西武信用金庫、信州大学繊維学部、株式会社 ハリマ漢方製薬、株式会社 コスメナチュラルズ、双葉商事 株式会社、株式会社 ヤマノ、王子ファイバー 株式会社、株式会社 スタジオ・ド・オロ、東京テキスタイル貿易 株式会社、株式会社 壁の穴、Arama Creek、株式会社 ヘルスビューティー、株式会社 大多喜ハーブガーデン、株式会社 マルハチ村松、株式会社 ヘルスエイジ、株式会社 横浜エージェンシー、京丹後市

■分科会設立趣旨
全国には多くの天然素材が眠っています。使い込めば、磨きこめば素材の味が出てくる、そんな多様性を持っているのが天然素材であり、天然素材の良さを再認識できる世代が GS 世代ではないでしょうか。
この分科会は、GS 世代及びそれ以上の世代に向け、「天然素材」を活用したものづくり（以後、「GS 的ものづくり」と言います。）を研究・実践していこうというものです。めざすは、天然素材を活用した産業起こし。地域活性化につなげ日本の産業にしていきたい、こんな思いを持っている分科会です。
全国に広がる GS 世代研究会会員企業には多くの英知と経験があります。共に天然素材を主とした新たな産業起こしに向け、取り組んでまいりましょう。

■当面の分科会活動の方向
・「シルク」に着目して研究・実践に取組む。
〔選定理由〕
・天然素材には多くの種類がありますが、多くの業種が参加されている GS 世代研究会にとって、天然素材としてのシルクは GS 的ものづくりの「すそ野が広い」ということから。
・例えば、シルクを作り出す桑の葉は、お茶、青汁へ。生糸からは着物、洋装、スカーフ、ハンカチ、下着、バッグ、帽子など。またタンパク質なので原料としてドリンク、健康食品、あるいは化粧品、石鹸。さらに再生医療用品などさまざまな業種が参加できる素材であること。
・これらのバイオテクノロジーや遺伝子工学という最先端技術を絡めれば、シルク関連素材は新たな時代をつくる大いなる素材といっても過言ではないこと。
・シルクは、繊維産業に関わっている方のみならず、食品、化粧品、医療、流通、研究機関、特に地域活性化に関わる地方自治体の方々にも大いに関係するため。なぜなら、地方にこそ天然素材はあり、この分科会は、それを事業化するノウハウを研究しようというもの。そしてこのノウハウはシルクに限らず、多くの天然素材に活用できるはず。

■分科会活動経過
平成 24 年 5 月　第 1 回設立会合（会場：ハリウッド株式会社〔東京都港区〕）
6 月　第 2 回会合　（会場：ハリウッド株式会社〔東京都港区〕）
8 月　第 3 回会合　（会場：信州大学〔長野県上田市〕）
10 月　第 4 回会合　（会場：京丹後市）

大学生提案の「着物ドレスの販売・リメイクサービス」が事業化

平成23年度の「十日町市ビジネスコンテストseason２」（通称：トオコン）で長岡大学の学生が提案し、最優秀賞を獲得した「着物ドレスの販売・リメイクサービス」が事業化されました。

【事業概要】

～ 祖母から母へ… 母から私へ… 思い出の詰まった着物をドレスへ ～

特別な思い出の詰まった着物を「パーティードレス」や「ウェディングドレス」等にリメイクします。大切な着物をオーダーメイドの手作業で縫製し、お客様に感動を与える商品として全国への販路を開拓、併せて着物の産地である地元産業の振興と貢献をします。Web サイトでの受注や着せ替え、今後はオーダーメイドだけでなくパターン化した着物ドレスの販売がきるように取り組みます。

トオコン本選会でプレゼンする長岡大学の学生(H23.12)

【事業化】

十日町市は、トオコン提案プランと市内事業所のマッチングによる事業化を図るため、「十日町市わか者ニュービジネス創造応援事業助成金」で支援を行っています。この助成金の交付を受けた市内の着物小売業者が事業主体となり、市内の服飾専門学校に着物ドレスの縫製を委託し、事業化に着手したものです。

「産業フェスタ」でお披露目された着物ドレス

この事業化により新たに製作された着物ドレスが、平成 24 年 10 月 20 日、21 日に開催された「十日町産業フェスタ 2012」で展示され、注目を集めました。

この事業につきましては、次のホームページをご覧ください。

http://wa-rinz.jp/dress/index.html

京都府京丹後市

「丹後小町踊り子隊」が始動!!

“丹後ちりめん”をまとい、“きもの”の特色を生かした踊りを披露する「丹後小町踊り子隊」が、平成24年11月17日、総勢15人で元気よくスタートを切りました。

ダンス未経験者から、ミュージカル・日本舞踊・チアリーディングなどの経験者まで、様々な経歴を持つ若い女性メンバーが、これから今年4月のデビューに向けて練習を重ね、デビュー後は、「丹後建国1300年記念事業」を始めとするさまざまなイベントで踊りを披露するなど、ふるさと丹後・丹後ちりめんのPRに、情熱をもって取り組んで行くこととしています。

☆“シルク”とともに歩んだ「丹後建国1300年」を発信

丹後地域は、平成25年に丹後建国1300年の節目を迎えます。

ちりめんの郷・京丹後市における絹織物の歴史は古く、奈良時代に丹後の国で織られた絹布「あしぎぬ」が聖武天皇に献上されたのは、まさに約1300年前（天平11年：739年）のことでした。

以来、現代に至るまで連綿と培われ発展してきた、本市における「シルク」や「丹後ちりめん」の伝統・文化、ひいては「丹後建国 1300 年」を、この事業を通じて広く発信するとともに、この歴史の大きな節目を契機に、若者の手による未来を見すえた『新しいちりめん文化』を創造していきます。

まずは扇子の扱いをマスター

思いのほか、ハードです

浴衣で練習、着付けの講習もしています

☆「丹後ちりめん」を使ったオリジナル和装などの制作

踊りの指導は、一昨年度“第26回国民文化祭・京都2011”都大路オープニングパレードの“京（みやこ）踊り子隊”でも指導を行った、NPO法人「京小町踊り子隊」。この他、「丹後ちりめん」を使ったオリジナル和装や「京丹後音頭」の制作も行うなど、一連の活動に積極的な協力をいただいています。

京丹後市内の事業者から和装生地について説明を受けました
⇒左写真中央：京小町踊り子隊代表 岩崎裕美さん

色とりどりのオリジナル和装が、
完成まぢか

○お問い合わせ先：京丹後市商工観光部商工振興課【℡0772-69-0440】

丹後ちりめんの里 よさの

ちりめん街道まるごとミュージアム

平成２４年１０月１３日、国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されているちりめん街道一帯を舞台に、「ちりめん街道まるごとミュージアム」が開催されました。

街道沿いには、ちりめん小物や特産品を展示・販売する「街道市」や、今年初めて寺院での「丹後ちりめんきものショー」を午前・午後の部の２回行いました。午前の部は、七五三・男着物を中心に、午後の部は、学生きものと女性きものを披露し、多くの人が華やかなショーに見入るなど、イベントを盛り上げました。

街道内でも艶やかな振り袖や上品な訪問着姿がたくさん見られ、イベントに華を添えていました。

ショー風景

YOSANO オータムフェスティバル 2012

平成２４年１１月１１日には、与謝野町の産業祭を開催しました。

今年は、地場産業の１つである「丹後ちりめん」にスポットを当て、「丹後ちりめんファッションショー」を初開催。「人の一生涯に関わる“きもの・シルク”の変遷の時代を追う」というテーマを掲げ、お宮参り・七五三・成人式・結婚式等のそれぞれのシーンに合った和装・洋装での美しい衣装を身にまといました。

会場内は、たくさんの来場者でいっぱいになり、美しい姿に魅了されました。

ショー風景

第３５回「紬の日」

平成25年1月5日（土）奄美市にて「紬の日」のつどいが開催されました。

本市では、昭和53年から毎年1月5日を「紬の日」と制定しており、奄美の基幹産業である本場奄美大島紬への認識を深めるとともに、本場奄美大島紬の振興による豊かな街づくりを推進するために、市民がこぞって紬を着用し、その良さを再認識することを目的としています。

今回は、昨年4月にオープンしたAiAiひろばを会場にもちつきやふるまい酒をはじめ、高校生による呈茶サービスや記念写真撮影サービス、ライブや高校生による紬ファッションショー等、各種イベントを開催するとともに紬着用者限定でお楽しみ抽選会を実施、多くの紬着用者が来場しました。

併せて、前回初の試みとして取り組んだ紬着用者数を集計する「チャレンジデー」を今回も実施、目標を600人に設定してチャレンジしました。残念ながら雨天という天候も影響し、409人と目標を達成することはできませんでしたが、少しづつ定着してきたように感じました。

また、紬大行進と題し、2012紬美人や紬着用者と、巳年にかけて毎年夏に開催されている「奄美まつり」からハブ隊に呼びかけ、小雨が降る中ではありましたが、傘をさしたりしながら皆で街中を練り歩く、大行進を行いました。

最後は奄美の伝統文化である八月踊り・六調を踊り、全体での記念撮影をして終わりました。参加者の中からは「やっぱり紬いいね」「きれいだね」などの声もあり、多くの方が紬に親しむことができた一日となりました。

来年以降も継続して実施し、少しでも紬に親しむ機会にしたいと考えております。

【お問合わせ先】奄美市紬観光課　TEL：0997－52－1111

シルクのまちづくり市区町村協議会・構成団体等一覧

（平成 25 年 1 月 1 日現在）

■会員（２６団体）

1	山形県鶴岡市	10	新潟県十日町市	19	京都府京都市
2	山形県長井市	11	新潟県小千谷市	20	京都府宮津市
3	山形県白鷹町	12	新潟県南魚沼市	21	京都府京丹後市
4	福島県川俣町	13	石川県金沢市	22	京都府与謝野町
5	茨城県結城市	14	山梨県富士吉田市	23	愛媛県西予市
6	栃木県足利市	15	山梨県西桂町	24	鹿児島県鹿児島市
7	栃木県小山市	16	長野県岡谷市	25	鹿児島県奄美市
8	群馬県富岡市	17	長野県駒ヶ根市	26	鹿児島県龍郷町
9	東京都新宿区	18	滋賀県長浜市		

◇役員

会　長　京都府京丹後市（市長　中山　泰）

副会長　山形県鶴岡市・福島県川俣町・群馬県富岡市・石川県金沢市・長野県岡谷市・京都府与謝野町・愛媛県西予市

監　事　山梨県西桂町・京都府宮津市

■特別会員［オブザーバー］（５名）

農林水産省生産局生産流通振興課特産農産物対策室長
経済産業省製造産業局繊維課長
経済産業省製造産業局伝統的工芸品産業室長
経済産業省製造産業局デザイン・人間生活システム政策室長
経済産業省中小企業庁経営支援部新事業促進課長

■顧問（１１名）

◎ファッションジャーナリスト

清水　早苗氏　　ジャーナリスト／クリエイティブ・ディレクター

◎クリエーションコーディネーター

松田　正夫氏　　（独）中小企業基盤整備機構近畿支部近畿支援事務局 プロジェクトマネージャー

岡田　茂樹氏　　日本ファッションプロダクト協会　代表理事

◎テキスタイルデザイナー

須藤　玲子氏　　株式会社布取締役

酒井　美和子氏　　（有）GBカンパニー代表取締役

福井　健二氏　　K.FUKUI PERSONAL OFFICE&EA 主宰

永森　達昌氏　　オフィス・ナガモリ代表

◎和装

早坂　伊織氏　　着物伝承家

笹島　寿美氏　　着装コーディネーター・帯研究家

◎研究機関

玉田　靖氏　　（独）農業生物資源研究所　遺伝子組換え研究センター 新機能素材研究開発ユニット長（工学博士）

長島　孝行氏　　東京農業大学　農学部農学科　教授（農学博士）

■協賛団体（２５団体）

◎蚕糸団体

（財）大日本蚕糸会・（社）日本生糸問屋協会・中央蚕糸協会・碓氷製糸農業協同組合

◎産地織物組合

鶴岡織物工業協同組合・福島県絹人繊織物構造改善工業組合・小千谷織物同業協同組合・山梨県絹人繊織物工業組合・滋賀県絹人繊織物工業組合・丹後織物工業組合・本場大島紬織物協同組合・本場奄美大島紬協同組合

◎絹業団体

（社）日本絹業協会・全国染色協同組合連合会・全国染織連合会・京友禅協同組合連合会・京都工芸染匠協同組合・日本織物中央卸商業組合連合会・(社)全日本きもの振興会・（社）全日本きものコンサルタント協会・(財)シルクセンター国際貿易観光会館（シルク博物館）・東京ネクタイ協同組合・日本繊維輸入組合・新宿区染色協議会

◎その他団体

GS 世代研究会

シルクのまちづくり市区町村協議会の設立趣旨

古来よりわが国に伝わる尊い宝、絹。

絹を用いる産業、すなわちシルク産業は、地域経済の中で重要な役割を果たし、地域の生活や風土に根付いた産業として我々の地域とともに発展してきました。同時に、悠久の歴史の中でこれら産業が培った技術により生み出される製品は、地域文化を育むと同時に、わが国文化の根幹に大きく関わり、地域の価値や日本の品格を伝えるものとして、産業・文化の両面で貢献しています。

ところが、社会・生活環境が急激に変化する中で、現在では資源の枯渇化や人材の不足、市場の縮小による需要減少など、地域のシルク産業の発展に支障が生じているとともに、近代化・平準化の中でわが国固有の誇りある文化の風化が危惧されているところです。

一般的に、シルク製品は、養蚕、製糸、織物、染色など多段階の工程の中で、それぞれに長年にわたって極められた究極の技術が、完璧なまでに調和され完成されます。またそのものづくりは、技術者同士の厚い信頼と連携の上に成り立ち、日本が誇るものづくりの原点ともなっています。さらに、世界においてもシルクは、かつてシルクロードという長大な交易ルートを創造し、産業を活性化するとともに東西文化の交流を育んできています。すなわちシルクは、単なる繊維素材ではなく、歴史的にも経済社会の様々な断面を相互に発展に導く共通のきずなであり、今後においてもシルクを通じた「連携」「国際展開」「産業活性化」「文化交流」などによって、様々な分野の未来に多くの示唆と可能性を与えてくれるものであると確信します。

こうしたシルクの持つ意味を改めて認識し、シルクに関連する産業、またはシルクに関係する歴史・文化を持つ市区町村が連携し、「シルク産業の活性化」や「シルク文化を活用した魅力ある地域づくり」など、シルクの意味を活用して新たな展望を切り開くため、「シルクのまちづくり市区町村協議会」を設立します。

平成２２年１月２６日

編集／発行　　シルクのまちづくり市区町村協議会

発 行 年 月　　平成２５年３月

【この情報誌に関するお問い合わせ先】

シルクのまちづくり市区町村協議会事務局

（京丹後市商工観光部商工振興課）

〒629-3101　京都府京丹後市網野町網野 353 番地の 1

TEL：0772-69-0440／FAX：0772-72-2030

メール：info@silkroad-japan.org

ホームページ：http://www.city.kyotango.lg.jp/silk/

ブログ：http://silk25.blog.fc2.com/